

## 観光客の回遊経路に関する考察 －飛騨高山を事例として－

田 中 智\*・和田 章 仁\*\*

### A study on an excursion course of tourists - A case study of Hida - Takayama -

Akira Tanaka and Akihito Wada

This study intended for a walk action of tourist to grasp the charm of city space in Takayama city. Walk routes of tourists was clarified by three investigations. As a result, walk routes of tourists was classified as five types, and the action range become clear, too.

#### 1. はじめに

近年高齢化の進展や完全週休二日制の実施による余暇時間の増大に伴い、人々が自由に動き回る時間が多くなってきていることから、その対象空間でもある都市空間の快適性が求められるようになってきた。その中で伝統的な建造物が数多く残り、町全体が情緒的な雰囲気醸し出している歴史都市においては、人々、特に観光客は町を散策する場合、魅力ある空間を好んで歩行すると考えられる。つまり、観光客にとって町を歩くという行為そのものが、その町を訪れる主な理由の一つに考えられることから、観光客の回遊ルートを精緻に把握することが、魅力ある都市空間の形成に対し重要な要素と考えられる。

そこで、本研究では、飛騨の小京都と呼ばれている岐阜県高山市を対象として、観光客が町を散策する経路を詳細に把握することに努めた。これにより、歴史都市における観光客の散策対象空間の魅力の解明に対し、重要な示唆を与えるものと考えられよう。

#### 2. 調査概要

観光客の歩行ルートを把握するためには多くの調査が考えられるが、ここでは現実に実施可能な三つの方法を選択して調査を試みた。実施した三調査とも長短があり、これらを比較検討しながら、観光客の回遊経路を把握することにした。

##### (1) 観光客へのアンケート調査

観光客に対して、現地で歩行ルートを地図に記入してもらった調査である。この調査は次のように行った。

---

\* 応用理化学専攻大学院生 \*\* 建設工学科

## 1) 調査方法

平成13年10月13日(土)に、高山市三町の伝統的建造物群保存地区において、観光客を対象にアンケート調査を実施した(以降「アンケート調査」という)。調査項目は個人属性(性別、年齢、居住地)、訪問回数、滞在予定時間と小京都らしさ、小京都らしさを構成している要素と観光ルート及び小京都を感じた場所である。取得票数は301票であり、観光ルートまで記入されていたものは182票(60.5%)であった。

## 2) 被験者の属性

男女別では、女性が63.5%、男性が36.5%と、女性が多くなっていた。年代別では、10代から70才以上の7段階で区切ったところ、20代が42.9%と最も多くなっており、続いて50代が18.9%、30代が18.6%、40代が10%の順であった(表-1 参照)。

訪問回数別では、「初めて」「2回目」「3回以上」の3項目で比較した。その結果「3回以上」が38.3%と最も高率であり、2回目と3回以上をあわせたりピーターの割合が全体の約6割を占めていた(図-1 参照)。滞在予定時間では「2時間以内」から「3日以上」までの5段階で集計した。その結果「半日」が42.9%と最も多く、続いて「1泊2日」の25.3%となっていた(図-2 参照)。

## (2) 観光客に対する追跡調査

駐車場などで観光客の被験者を選出し、追跡する調査方法である。この調査は次の要領で実施した。

## 1) 調査方法

平成14年10月12日(土)に高山市内において駐車場を起点として観光客を対象に追跡を行い、対象者の性別、年齢層、人数、追跡時間を地図上に記入した(以降「追跡調査」という)。なお、追跡の途中で飲食店等時間のかかる場所に入った場合はそこで調査は打ち切りとした。

追跡の結果、駐車場を起点として戻ってきて完結したものが15組、追跡の途中で終了したものが24組、追跡を始めた直後に入店し中止となったものが27組の合計66組であった。そのうち有効サンプルは、被験者の属性と歩行速度に関しては追跡が完結した15組と、途中で終了した24組の、計39組とし、滞在時間と歩いた距離に関しては追跡が完結した15組とした。またアンケートは取得サンプル数が19と少なかったため、本研究からは除外することとした。

## 2) 被験者の属性

男女別では男性45.5%、女性54.5%であった(表-2 参照)。グループ人数は夫婦が61.5%と最も多く、ついで家族連れが15.4%、5人組が10.3%、4人組が7.7%、3人組と6人組が2.6%であった(図-3 参照)。年齢構成は青年以下、壮年、熟年の三階層として調査した結果、壮年の55.5%が最も多く、次いで熟年、青年以下の順であった(図-4 参照)。

表-1 属性(アンケート調査)

	男性		女性	
10代	1	0.9%	2	1.0%
20代	32	29.1%	97	50.8%
30代	30	27.3%	26	13.6%
40代	13	11.8%	17	8.9%
50代	24	21.8%	33	17.3%
60代	8	7.3%	11	5.8%
70才以上	2	1.8%	5	2.6%
合計	110	100%	191	100%

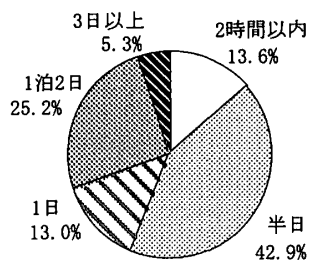
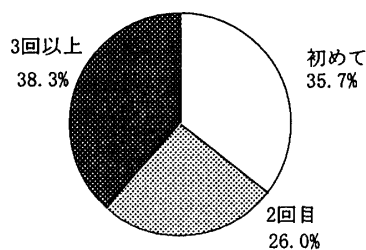


図-1 訪問回数(アンケート調査) 図-2 滞在時間(アンケート調査)

### (3) 観光客への写真依頼調査

追跡調査と同じように、観光駐車場で観光客を選出し、レンズ付きフィルム（インスタントカメラ）を手渡し、その撮影写真をもとに歩行経路を把握するものである。この調査は次の要領で実施した。

#### 1) 調査方法

平成 15 年 10 月 4 日（土）、5 日（日）の 2 日間、高山市内の 4 箇所の駐車場において、車（自家用車または観光バス）で高山を訪れた観光客グループに 1 台のレンズ付きフィルムを手渡し、気に入った景観構成要素を撮って来てもらうことを依頼し、回収した（以降「写真調査」という）。レンズ付きフィルムを手渡した際、調査表に被験者の情報（性別・年代）と手渡し時刻、回収時に返却時刻を記入した。手渡し台数は 40 台で、回収台数は 39 台であった。また、とられていた写真のうち、有効サンプル数は（写真枚数）531 枚であった。

#### 2) 被験者の属性

被験者の性別は、男性・女性がほぼ同数であった（表-3 参照）。年代別では、壮年（概ね 30～50 歳代）が約 65%を占め、続いて青年（大学生含む概ね 20 歳代）、熟年（概ね 60 歳以上）、中・高校生以下の年齢順で合った（図-5 参照）。また被験者群を「家族連れ」「熟年のみ」「壮年のみ」「青年のみ」の 4 つのグループに分類した。その結果、「壮年のみ」が約 60%、以下「青年のみ」「家族連れ」「熟年のみ」の順であった（図-6 参照）。

### 3. 歩行経路の類型化

観光客の歩行経路については、アンケート調査と追跡調査の二調査が、被験者が高山市内のどの道を歩いたのかを知ることができる調査であることから、これら両方から分析を行った。

表-2 性別（追跡調査）

男性	50	45.5%
女性	60	54.5%
合計	110	100%

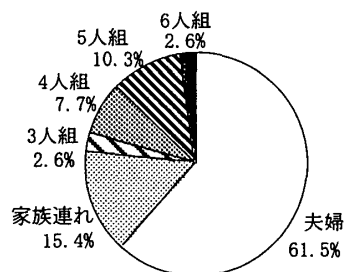


図-3 グループ構成（追跡調査）

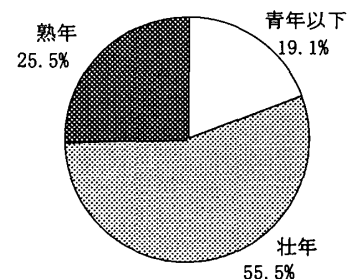


図-4 年代別（追跡調査）

表-3 性別（写真調査）

男性	53	48.6%
女性	56	51.4%
合計	109	100.0%

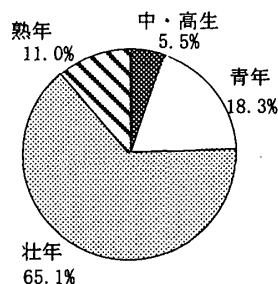


図-5 年代別（写真調査）

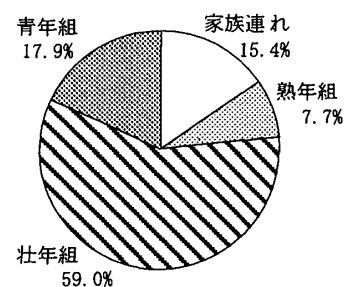


図-6 グループ構成（写真調査）

## (1) 歩行ルートの類型化

アンケート調査において観光客自身の手によって歩行ルートを地図に記入してもらった結果を、以下のように類型化<sup>1)</sup>した。

回遊型：ある区域を一周、あるいは行き帰りの道筋に重複の無いルート。

往復型：始点と終点との道筋に分歧が無く行き帰りが同一となるルート。

寄り道型：複数の目的地を重点的に辿るルート。

徘徊型：ある区域をくまなく散策するルート。

混合型：2つ以上のルートの組み合わせされているルート。

有効サンプル数 182 票を集計した結果、回遊型は 4 票 (2.2%)、往復型は 73 票 (40.1%)、寄り道型は 46 票 (25.3%)、徘徊型は 31 票 (17%)、混合型は 28 票 (15.4%) となった。しかしながら、回遊型のサンプル数が 4 票であったため、これを分析から除外することにした (図-7 参照)。

この結果、訪問回数との関連では往復型は「初めて」に多く、訪問回数が増えるに従って減少した。逆に寄り道型は「3 回以上」に多く訪問回数が少なくなるに従って減少している (図-8 参照)。また、滞在予定時間との関連でみると、往復型は「2 時間以内」と「半日」の割合が多く、さらに徘徊型では、「2 日以上」の占める割合が他と比較して高くなっていた (図-9 参照)。

## (2) 追跡調査による類型化

追跡調査における歩行ルートについてはアンケート調査の類型化にあてはめて集計した。その結果を追跡調査の結果と比較したところ、アンケート調査では最も多かった往復型は追跡調査においては 6.7% と最も少なく、アンケート調査では 2 番目に少なかった混合型が追跡調査では最も多く、40% となっていた (図-10 参照)。

## 4. 歩行状況とその範囲

観光客の歩行距離と歩行範囲について、追跡調査と写真調査の両方から分析した。追跡調査では

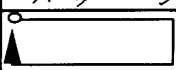
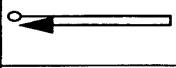



パターン	名称	サンプル数	%
	回遊型	4	2.2
	往復型	73	40.1
	寄り道型	46	25.3
	徘徊型	31	17.0
	混合型	28	15.4
		182	100.0

図-7 歩行ルートの類型化 (アンケート調査)

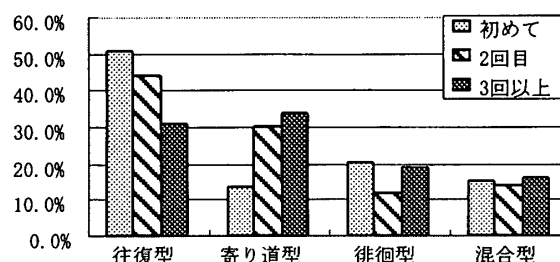


図-8 ルート別訪問回数 (アンケート調査)

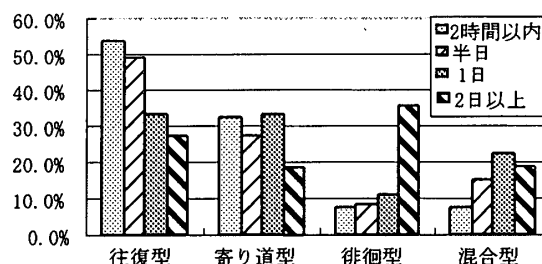


図-9 ルート別滞在時間 (アンケート調査)

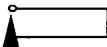

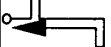


パターン			回遊型	往復型	寄り道型	徘徊型	混合型	
パターン図								合計
調査方法	アンケート調査	サンプル数 (%)	4 (2.2)	73 (40.1)	46 (25.3)	31 (17.0)	28 (15.4)	182 (100.0)
	追跡調査	サンプル数 (%)	4 (26.6)	1 (6.7)	3 (20.0)	1 (6.7)	6 (40.0)	15 (100.0)

図-10 アンケート調査と追跡調査の歩行ルートの類型化比較

具体的な被験者の歩行距離や滞在時間、歩行範囲を把握でき、写真調査では滞在時間と歩行範囲を把握できた。

#### (1) 観光客の歩行距離

追跡調査において地図に書き入れた観光客の追跡ルートをキルビメーターで測定した。測定は、1 サンプルにつき 3 回測定し、その平均値を算出した。その結果、0.5～1km と 1～1.5km が 33%、1.5～2km が 20%、0.5km 未満と 2km 以上が 7%となり、全体の平均歩行距離は 1204mと三町を一周した距離（約 1300m）とほぼ同じとなった（図-11 参照）。グループ構成別に見ると、それぞれの平均歩行距離は夫婦が 1383m、家族連れが 962m、その他が 922mであった。

#### (2) 観光客の滞在時間

追跡時間を滞在時間として考えた結果、30～60 分が 60%と最も多く、60～90 分が 20%、30 分未満が 13%、90 分以上が 7%であり、全体の平均時間は 51.4 分であった（図-12 参照）。グループの人数構成別に見ると、それぞれの平均滞在時間は家族連れが 74.5 分、夫婦が 54.8 分、その他が 35.8 分となった。

また写真調査の被験者 39 組を行動時間別に分けると、「60～90 分」が 14 組、「90～120 分」が 11 組で合わせて 25 組（64.1%）と半数以上を占めている。一方、「60 分未満」及び「120 分以上」はそれぞれ 7 組（17.9%）であった（図-13 参照）。次にグループ別に見ると、「家族連れ」は比較的長時間行動しているが、その他のグループは「60～120 分」が中心となっている（図-14 参照）。このうち「熟年のみ」は取得票数が 3 票と少なかったため除外し、各グループの平均行動時間を算出したところ、「家族連れ」が 127 分と最も長く、「青年のみ」が 90 分、「壮年のみ」が 88 分となった（表-4 参照）。このことから「家族連れ」は子供にあわせて行動するために行動時間が長時間に及ぶことが類推される。

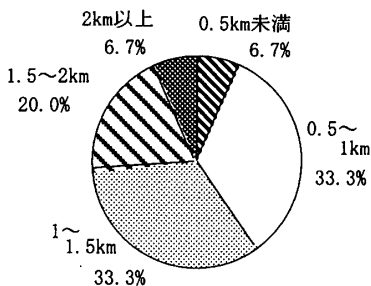


図-11 歩行距離（追跡調査）

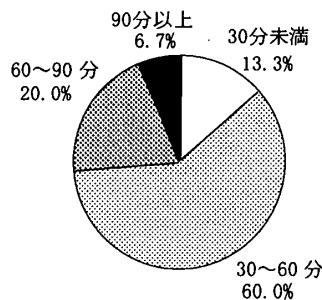


図-12 滞在時間（追跡調査）

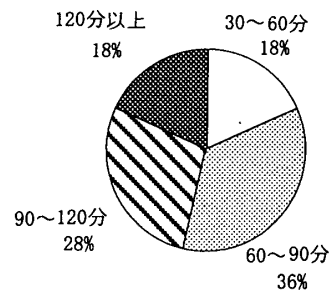


図-13 滞在時間（写真調査）

表4 各グループの行動時間（写真調査）

NO	グループ	時間	NO	グループ	時間
1	熟年	3 : 0 5	21	壮年	1 : 2 0
2	家族連れ	1 : 5 5	22	壮年	1 : 1 0
3	熟年	1 : 5 0	23	壮年	0 : 4 6
4	壮年	1 : 2 0	24	壮年	1 : 2 7
5	青年	2 : 1 5	25	家族連れ	0 : 4 5
6	青年	1 : 3 8	26	青年	2 : 2 3
7	壮年	1 : 1 4	27	壮年	1 : 0 9
8	壮年	3 : 0 8	28	家族連れ	1 : 4 9
9	壮年	0 : 4 5	29	壮年	1 : 5 0
10			30	壮年	1 : 5 2
11	青年	1 : 2 0	31	壮年	1 : 5 2
12	壮年	1 : 2 0	32	家族連れ	4 : 0 4
13	壮年	2 : 1 2	33	家族連れ	1 : 1 9
14	壮年	1 : 4 8	34	壮年	0 : 5 2
15	壮年	1 : 3 3	35	青年	1 : 1 3
16	壮年	1 : 1 6	36	壮年	1 : 4 6
17	熟年	0 : 5 2	37	青年	1 : 0 1
18	壮年	0 : 5 4	38	家族連れ	2 : 5 0
19	壮年	1 : 0 8	39	青年	0 : 4 3
20	壮年	1 : 0 5	40	壮年	2 : 0 0

注) No.1 0は非回収

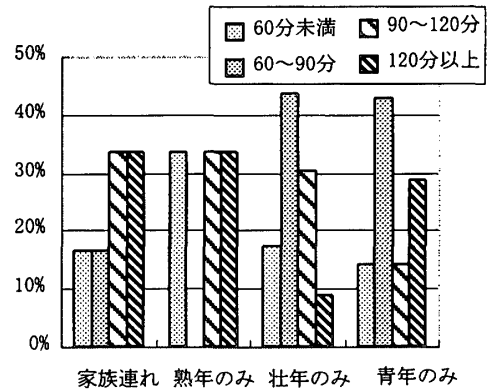


図-14 グループ別滞在時間（写真調査）

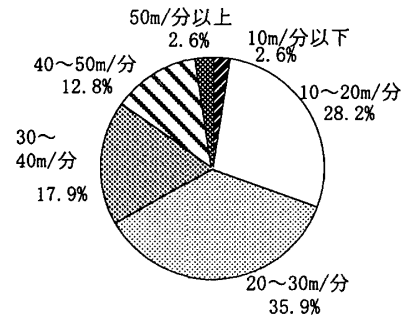


図-15 歩行速度（追跡調査）

### (3) 観光客の歩行速度

追跡調査から観光客の具体的な歩行距離と歩行時間が把握できたので、これをもとに観光客の歩行速度を算出した。その結果、観光客の平均歩行速度は分速 24.6m とかなり遅く、一番速いグループでも分速 61m という穏やかな速度<sup>2)</sup>で歩いていた（図-15 参照）。

### (4) 観光客の歩行範囲

写真調査によって観光客が撮影した写真を元に歩行範囲を分析した。分析する上で、観光客の歩行範囲を次のように 4 分割<sup>3)</sup>した。

エリア 1：三町伝建地区を含む歴史的町並み保存地区

エリア 2：高山陣屋を含むエリア 1 の周辺地区

エリア 3：宮川朝市を含むエリア 2 の周辺地区

エリア 4：高山屋台会館・桜山八幡宮を含むエリア 3 の外縁部

（図-16 参照）

さらに 39 組の観光客がそれぞれのエリアを訪れたかをみると、エリア 1 もしくはエリア 2 へは大半の観光客が訪れていることが分かる（図-17 参照）。次に歩行時間別にみると、歩行時間が長くなるにつれて歩行範囲が比較的広域（エリア 3・4 へ訪れている）になっていることがわかる（図-18 参照）。最後にグループ別にみると、「青年のみ」はエリア 1・2 を中心とした範囲を行動し、年齢が上がるにつれて歩行範囲が比較的広域になっていることがわかる（図-19 参照）。

なお追跡調査における観光客の歩行範囲については、把握できた 20 サンプルについて集計した。

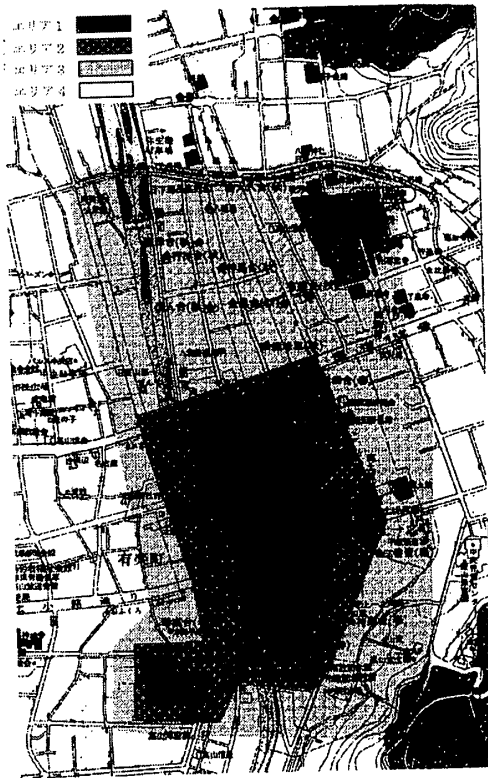


図-16 歩行エリア

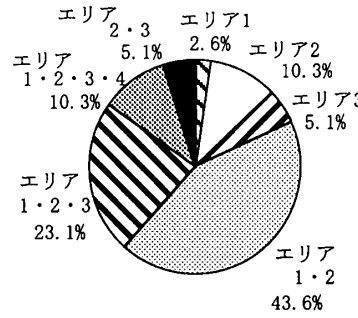


図-17 歩行エリア割合 (写真調査)

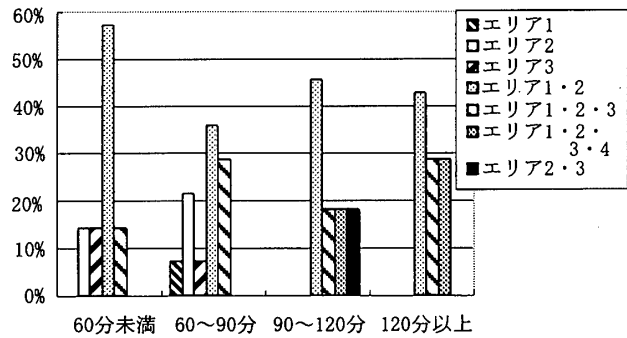


図-18 時間別行動エリア (写真調査)

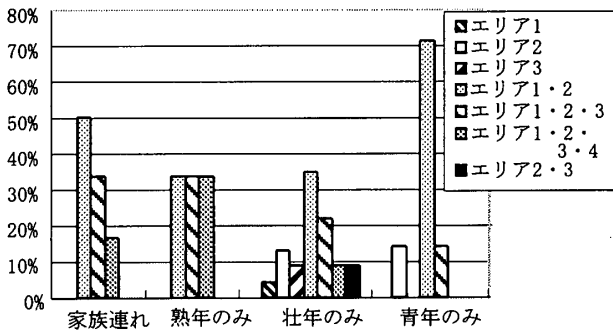


図-19 グループ別行動エリア (写真調査)

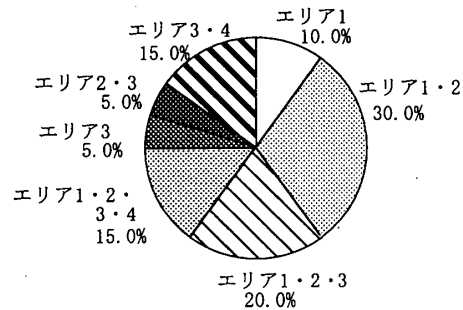


図-20 歩行エリア割合 (追跡調査)

その結果、エリア1やエリア2を訪れている観光客は全体の75%であり、写真調査と同様に三町の古い町並みや高山陣屋周辺に多くの観光客が訪れていることがわかった (図-20 参照)。

## 5. 各調査の比較

各調査において得られた特徴を比較したものが表-5である。これより、次のような結果が得られた。

1) 滞在時間において追跡調査と写真調査ではやや差異がみられるが、30分～120分程度の観光行動を行う被験者が全体の半分以上を占めている。追跡調査では食事等時間がかかる行動を行った被験者は調査を打ち切りとしたが、写真調査では散策行動だけでなく、食事や観光施設に長時間立ち寄った被験者も存在すると思われる、そういった被験者の存在が差異として現れたものと思われる。

表-5 各調査の特徴比較

項目 調査名	被験者の 属性	散策範囲	歩行経路	被験者の 視覚情報	歩行距離	散策時間	歩行速度	サンプル数
アンケート調査	○	△	△	×	×	△	×	○
追跡調査	△	○	○	×	○	○	○	×
写真調査	△	○	×	○	×	○	×	△

2) 観光ルートの類型化については、アンケート調査と追跡調査では差異が見られるが、これはアンケート調査では土地勘の無い観光客が地図上に観光ルートを書き込んでいるため、結果として曖昧な記述になりがちであるためと思われる。

3) 写真調査では追跡調査のような詳細な観光ルートを把握することはできなかったが、被写体を分析することにより、被験者の観光行動の範囲をエリア分割することができた。また追跡調査の結果についてもエリア化し、写真調査と比較した結果、二調査双方において、「三町伝建地区を含む歴史的町並み保存地区」(エリア 1) 及び「高山陣屋を含むエリア 1 の周辺地区」(エリア 2) に多くの観光客が訪れている事が確認できた。

## 6. まとめ

本研究は観光客の徒歩による観光行動時の歩行経路に着目し、その動向を三つの異なった手法で探った結果、以下のような知見を得た。

1) 観光客の歩行経路を分析した結果、回遊型、往復型、寄り道型、徘徊型、混合型の 5 タイプに分類することができた。

2) 初めて高山を訪れた観光客は、特定の場所を単純なルートで歩行している一方、訪問回数の多い人は複数の場所を散策していることがわかった。

3) 観光客の行動時間は「30～120 分」が中心となっている。その中でも「家族連れ」が比較的長時間行動している。

4) 観光客の大半が「三町伝建地区を含む歴史的町並み保存地区」(エリア 1) 及び「高山陣屋を含むエリア 1 の周辺地区」(エリア 2) を中心に行動している。

5) 若年の観光客は「三町伝建地区を含む歴史的町並み保存地区」(エリア 1) 及び「高山陣屋を含むエリア 1 の周辺地区」(エリア 2) を中心に行動しており、年齢が上がるにつれ行動範囲が広域になっている。

今後の課題は、本研究で得られた情報を、魅力ある町並み景観形成との関わりを追求していく必要がある。

## 参考文献

- 1) 田中 智・和田 章仁; 観光客の行動から見た小京都の意識分析-飛騨高山を事例として- 平成 14 年度 土木学会第 57 回年次学術講演会公演概要集 p. IV-161~162、2002 年
- 2) 藤原 健固; 歩きの科学 講談社 1988 年
- 3) 田中 智・和田 章仁; 高山における観光客の行動と魅力的な景観要素の把握 -写真撮影を通して- 平成 16 年度 土木学会関西支部年次学術講演概要 p. IV-55-1~2、2004 年

(平成 16 年 11 月 30 日受理)